



攻めの経営

挑戦し続ける企業

特集

コロナ禍により、生活様式や社会通念、消費動向までもが劇的に変化している。パラダイムシフトが起きている今、正解はまだ見えない。答えのない時代だからこそ、攻めの姿勢を貫くことが大切だ。常に挑戦している企業はどこにフォーカスして、攻め込んでいるのか。不確実な時代の“攻め方”のヒントを探る。

取材・文 米田真理子

こめた・まりこ 1965年生まれ。フリーライター。ビジネス誌、マネー誌、経済誌、ウェブサイトなど、幅広く活躍している



シヤチハタ株式会社

成功体験に安住せず、新手を打ち続ける

伝票にボン、書類にボン……。オフィスで毎日のように利用されている「シヤチハタのスタンプ」。一見アナログなイメージを抱きがちだが、実は同社は早くから電子文書に対応するサービスを展開している。その歴史を紐解くと、革新に次ぐ革新があった。

撮影 亀山城次

電子捺印サービスを無料で開放

新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言下、多くの会社で在宅勤務が導入された。その際に課題の一つとなったのが、企業などでの決裁の在り方だ。「はんこを押すためにだけ出社しなければいけない」との嘆きの声も上がっていた。そうしたなかで、シヤチハタは、クラウド

捺印サービス「パソコン決裁Cloud」の無料開放に踏み切った。パソコン決裁Cloudは、認め印などを電子印鑑として登録し、各種文書の閲覧や捺印をウェブ上で行えるアプリケーションだ。三月から六月

までの無料開放期間中、二七万件近い利用申し込みがあったという。シヤチハタのスタンプといえば、はんこの代名詞。朱肉を使わず手軽に押せるネーム印や日付印は、多く

の企業で愛用されている。そんな同社がパソコン決裁Cloudをリリースしたのは一九九五(平成7)年、実に

二五年も前である。代表取締役社長の舟橋正剛氏によると、きっかけは危機感だった。「ちょうどオフィスにもパソコンが入り始めた時期です。ペーパーレス化も唱えられ、将来、はんこの出番がなくなりかねない。そうなる前に手を打ったわけです」

ところが、二五年間、サービスは「なかなか普及しない」(舟橋社長)状態が続いた。それでも、いつかは

実を結ぶだろうとバージョンアップを繰り返していたのである。無料開放の終了後も利用を続けたいと、六月のうちから有料契約に切り替えるユーザーも続出した。好評を博した理由は、一印鑑につき月一〇〇円というわかりやすい料金体系に加えて、パソコンやスマー

case 1 p19
シヤチハタ株式会社
代表取締役社長 舟橋正剛

case 2 p22
株式会社
コーポレーションパールスター
代表取締役 新宅光男

case 3 p24
株式会社クリスプ
代表取締役社長 兼 CEO 宮野浩史

interview p26
名古屋工業大学大学院
工学研究科社会工学専攻
教授 渡辺研司